

# 全身美容鎧使い

萌矢氏

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

V R M M Oゲームで俺TRUEEEする話です。

どうでもいい過去の話

目

次

本編  
0 0 0 0  
0 0 0 0  
0 0 0 0  
0 0 0 0  
0 0 0 0

18 15 12 9 4 1

# どうでもいい過去の話

0000

だいたい5年ぐらい前の話だ。

当時の俺は、荒んでいた。荒れに荒れていた。

いや、不良とかヤなんとか方面でなく、精神的に。

ことの始まりは、俺がリストラされたことだつた。

決して不祥事を起こしたり不正したりハラスメントもせずされず、ごく普通の社員だつたはずなんだが。

後から聞くところによると、お偉いさんの仲良しさんの息子さんの娘さんが歩きスマホしてたら俺にぶつかつて、俺がそれを注意したから、らしい。いやなんで???

ともかく、急に無職になつた。

当時の俺は頭の中が大パニックになつていて、早く帰つてきたことに驚いた母さんのことも無視して自室で塞ぎ込んだ。

その日の夜。母さんからただ事ではないと連絡を受け早急に仕事を切り上げ帰宅した父と、大喧嘩をした。

俺はまだ思考がとつちらかつたままひたすら暴言を吐き、父もまた言葉で切り返してきた。  
あわやこのまま殴り合いになるかと思つたその時、急に母さんが倒れた。

ストレス性の病気だつたようだ。

喧嘩中その場にいながら、ひたすらに静かだつたのはそういうことだつたらしい。

幸い命に別状はなく、病院に搬送されたものの、すぐに退院した。

世界は残酷だつた。

母さんのこともあり、喧嘩は止め、お互に頭を冷やしてから話をすることになつた。

具体的には、俺一人旅と両親二人旅、同じ日に別々の方へ旅行して、

心身リフレッシュしようじゃないかって。

俺だつておかしくなつてたのは分かつていたし、確かにそれは必要だと了承した。

俺はレンタルカーで、両親はマイカーで旅立つた。  
夕方頃、レンタルカーを返して帰宅したが、まだ両親の車は無かつた。

先に家で待つてよう。ドアを開けた俺の耳に電話の音が鳴り響いた。

そういうえば今日はなんのしがらみもなく行こうと、財布しか持たずに行旅行に出たことを思い出した。

とりあえず電話に出た。そのまま落とした。

両親の葬儀が終わつた後、一人で家にいた。

俺の失業保険と、両親の生命保険。それと相手から貰つた莫大な賠償金。

俺に残つたのは、これらだけだつた。

そのまま1年、家から出なかつた。

死にたいとは思わなかつたけど、生きようとも思えなかつた。  
死んでるように息をしながら毎日を繰り返していた。

もう1年経つた。

心のひび割れは以前治る気配を見せなかつたが、多少の修繕はされたようだ。

この頃から、インターネットの世界に引きこもるようになつた。  
日々、小さな動物や愛くるしい生き物の動画を見続けた。

さらに1年が経つた頃、新しいゲームが発売されたというニュース  
が目に入つた。

そう言えば昔はゲーム好きだったな、なんて人間らしい気持ちを独りごち、ほんの気まぐれに調べてみた。

そして俺の世界は変わった。

2年後。つまり現在。

俺は相変わらず家からほとんど出ない生活を続けて いるが、すっかり心の怪我は完治していた。代わりに廃人になつた。

それはなぜか。当然ゲームのおかげである。ゲーム廃人である。

俺はこいつに命を救われたのだ。間違いない。

「おい知つてるか？ 今グリフォン狩りが流行つてるんだつてよ」「あれだろ？ レアの壊れ装備」

「未だに落ちたつて聞いたことねーけどガセなんじやねーの？」  
「情報源が例の”店”らしいからな、間違いなく出る……はず」  
「てめーも信じてねークチか、仕方ねーよなーこんだけ空振りだと」  
「それでも挑みやすいし、しばらくは混みそうだ」  
「ゞ苦労なこつた」

冒険者ギルド本部、本部内の傍らにある酒場ではプレイヤーたちが食つたり飲んだりしながら話をしていた。

聞こえてくる喧騒の中から、面白そうな話を聞き分け、そいつを肴にこちらも酒を煽る。

「マスター、お代わり」

「はい」

グラスがひかれたと思つたら、すぐに新しいのが差し出される。

「流石」

「大したことじやないですよ、特にあなたの場合は」

「そらそうか。初めて来て以来同じものしか頼まなかつたしな」

「ふふ、おかげさまで一番上手く作れるようになつてしまいまして。

今では当店一推しとさせさせていただいてます」

「おーそりやめでたい、めでたい祝いに追加で！」

「はい、どうぞ」

「くつそれも予見済みかあ」

「ふふふ……」

「こここのマスターとも長い付き合いだ。  
人間じやないとは思えないと」

しばらくして、俺は店を出た。

外は街の街灯やらを除けば真っ暗である。深夜というやつだな。  
時計を確認すると、まだ14時だった。

思ったより時間が経つてなかつたが、今は深夜なので特に予定もない。

蟲原にしている宿屋へ向かい、部屋のベッドへ入り込んだ。

ログアウト。

機材を外し、一息ついた。

えーっとゲーム内は確か8倍速だつたな。向こうで日の出ぐらいから活動しようと思うと……30分ぐらいかな？

軽くストレッチして、小腹空いたしなんか食べて、水分補給して、トイレ行つて……まあそんな感じで時間潰せばいいや。

とまあ、こんな俺は現在31歳。無職。童貞。天涯孤独。  
そして超を付けても許されそうなぐらいのゲーム廢人である。  
名前はまだない。嘘です。

再ログイン。

ど平日の昼過ぎだと言うのに、プレイヤーの数はかなりのものだ。  
お前ら働け。俺は働かん！

ゲーム内時間的には日が昇り始めた、まだ薄暗い街中にも関わらず人の行き来は激しい。

それはプレイヤーのみならず、キャラクターたちも含まれている。  
キャラクターの大半は、日の出と共に目覚め、日の入りと共に眠る。  
プレイヤーが直接関わり合うキャラクターは、24時間起きてる。  
ブラックすぎるわ。

まあモブとメインの差つてどころか。モブの方が楽そうではあるが。

ちなみにさつきのマスターもブラック社員です。深夜に俺ことプレイヤーと喋つてたしな。

街中は騒がしいとは言え、街から離れていけば静かになっていく。あの喧騒の大半は深夜から今までどつかで稼いできた奴らと、それを狙う商人プレイやつてる奴らだ。

なんで街の外へ向かえば、賑やかさも遠ざかる。

ブラック門番に挨拶をしつつ、俺は外へ出た。

平原、平原、平原。地平線まで続いている。

ここは街の東口。ひたすら平原が続くエリアだ。

ちなみに南には森林、北には山岳、西へは広い街道と、拓かれた自然を見ることができる。

典型的な配置だと思う。まさにスタート地点つて感じ。

実際スタート地点です。ゲーム開始時はみんなここから。

その中でも平原つてのは、出てくるのは雑魚ばっか、ドロップも美味しくない、そして無駄に広いと三拍子揃つたクソ狩場である。公式からもそれとなく言われてた気さえする。役に立たないとかなんか……。

でも俺はここが好きなんだ。好きすぎてこの街をずっと拠点にしてるぐらいには、ね。

平原は相変わらずだだつ広くて、そしていつもの通り誰もいなかつた。

攻略サイトに潜む検証中毒の兵つわものどもにより、稼働から2年経つこのゲームの情報はかなり浚われているだろう。

しかし、ほぼ全プレイヤーの中で多くて1人しか満たせないような特殊クエストとかもあって、細かいところはブラックボックスなようで。

とにかく、その攻略サイトにもボロクソ言われてる存在意義皆無の

場所なわけだ。

でも俺は、ここが好きなんだ。ここに来たくて、スタート地点の……これさつきも同じこと考えてたな。とにかく好き。

さて、だつたらどうしてこんな場所が好きで好きで堪らないのか。

理由は一つ。

僕もブラックボックス側のプレイヤーだからですね。

「これだけ離れれば誰にも見えないかな。そもそも【隠密】とか【無音】とか【気配希薄】とか色々併用してるし見つかることもないとは思うけど」

これらのスキル、結構強いんですよ？

少なくともスタート地点にいる奴が使えるものではないね。

「よし。『次元門解放』、いつもので」

あいよーってな幻聴を聞きつつ、『門』に入った。

この『門』も、トップシークレットスキルみたいなものですね。俺はブラックボックスのおまけでほんの少しだけ使うことができる。

というか俺の開く『門』は行き先が1つしかない。一部のプレイヤーが持つトップシークレットとしての『門』はだいたいこの1つだけつて奴だ。

それだけでもトップシークレット扱いされているので、本当のことは、もつとやばい。つまりブラックボックス。

まあそんなことはどうでもよろしい。

門を通り抜けるとそこは、スライムだつた。

「おっすーただいまー」

俺が声をかけた途端、多種多様なスライムが俺に押し寄せてくる。押し寄せて、のしかかり、それはもう押し潰さんとばかりに集まる。ここは『樂園』。スライムの、スライムによる、スライムのための世界だ。

スライム、と言わると割とたくさんのイメージがあるだろうが、こここのスライムはすべて水まんじゅうみたいな奴だ。ぷにぷにのもちもちでうちょーんもねじねじもできる。

しかもカラフル。たくさんのかラーバリエーションがある。

なんなら1スライムがマーブル模様みたいになつてゐるのすらいる。さて。

いい加減俺のブラックボックス、もといこのゲーム内にて所有者が俺しかいない固有スキルをお披露目しよう。

そう！ 我こそはスライムの頂点に君臨するもの！

【スライム園の園長】である!!!!!!

ブラックボックススキル、【スライム園の園長】。

簡単に言うと、『樂園』に住むすべてのスライムと仲良くなるスキルだ。

それだけって思う？ 残念ほんとにこれだけ。

でも、俺にとつてはまさに神スキルだつた。

この神スキルを会得した経緯をお話しあながた。

ゲームが始まる前の俺は、リアルでメンタルがやられていて、とにかく癒しを求めていた。

そのとき、このゲームの宣伝を見たんだ。そこにはとてつもないクオリティのグラフィックに、高度なAI、ド派手な戦闘……はどうでもよくて、とにかく綺麗だつたんだ。

この綺麗な世界で癒されたいと願つた俺は、ゲーム発売日から即プレイを始めた。

そして見た。聞いた。感じた。

本当にそこに暮らしている人たちを、遊んでいる子供たちの声を、そこを吹き抜ける風を。

いてもたつてもいられなくなり、当時メンタルボロボロながら、必死に聞き込みをして、街の東口から出していくと綺麗な平原が広がっていて、こちらから刺激しなければ何もしてこないやつらしかいない（あとから考えたらモンスターのことだつた）場所がある、という情報をを得た。

そのまま即行きました。

どこまでも続いていそうな平原、吹き抜ける心地よい風、それに揺られさわさわと聞こえる草の音色。

俺はすぐに走つた。平原をまっすぐ走つて走つて……疲れて、倒れこんだ。

荒い呼吸を繰り返していても、心はずつと爽やかだつた。

こんなにも、優しい場所があるなんて。  
ここでなら、心のケアに最適じゃないかと思えた。

しばらく寝転んでいたら、ふと何かが目に入った。  
スライムだった。平原と同じような、淡い緑色の。  
可愛い。思わず撫でてしまつた。ひんやりしてるとと思つたけど、  
なんだかちようど良いぐらいの温かさだつた。  
けど、忘れていた。

モンスターに刺激を与えると、アクティブになり襲いかかってくる。

やばいと思つて立ち上がりながら、でもこんな可愛いスライム倒せ  
ないと思いつつ初期装備の短剣に手をかけて……そこで気付いた。  
スライムは全然敵対してなかつた。ぽよんぽよん跳ねてた。可愛  
い。

結局俺は、ログアウト寸前までそのスライムと一緒にいた。

撫でたり、遊んだり、話したり（返答は当然ないので独り言）、とにかくずつと一緒にいた。

ログアウト時間が迫つて、俺がここを離れなきやいけないと知つて  
か知らずか、とても悲しそうに見えた。

だから俺は、名前を付けて、約束した。

必ずまた来るから、その時はもつとたくさん遊ぼうな。もつちい。

…………回想長い？ 大切なことだつたからちゃんと聞いておく  
れよ。

次の日、すぐログインして、ゲーム開始後5回無料で宿泊できる宿  
を飛び出し、そのまま東へ東へ。

この頃は満腹度の設定もまだなくて、とにかく1日中遊ぶために平  
原へ急いだ。

ちなみにこの時点では平原はクソ狩場認定され、人気が消えた。<sup>ひとつけ</sup>

平原に入つてからもしばらく走つた。もつちいと出会つたのはかなり進んだ先だつたから。

で、走つて割とすぐぐらに、前方で跳ねてるスライムを見かけた。というかもつちいだつた。

覚えてくれていたこととか、わざわざ向こうもこつちに進んできてくれてたこととか、なんだか嬉しくて涙が出て止まらなかつた。それを見たもつちいがたぶんびつくりして、跳ねたり足元に擦り寄つたりしてきつたのが可笑しくて、笑つた。

その日も遊び倒して帰つた。

次の日も遊び倒そうと思つて平原に行つたら、もつちいの他にスライムが3匹いた。遊び倒した。

次の日は、さらにスライムが増えていた。

遊び倒した。

次の日は、スライムまみれになつていた。

そして帰ろうとして、宿がないことに気が付いた。どうしようかと考えていたら、まみれまくつたスライムのうちの1匹が、何かをくれた。

それは不思議な光る玉みたいなもので、なぜかそのまま俺の体に吸い込まれて消えて。

そして、俺は【園長】になつた。

結局その日はスライムにまみれたままログアウトした。

とまあこんな感じです。

そこからずつと俺は【園長】となつて、スライムたちとさらに仲良くなり続けています。

可愛い。

【園長】とは言うものの、特に管理をするようなことはない。大勢のスライムに導かれるまま『樂園』へ行き、遊んだりぼーっとしたりと気ままに過ごしている。

自分用に買つていた料理アイテムと一緒に摘むことはあるが、わざわざ食べ物を用意しなくてもいいのだ。

そもそもスライムにとつて食事は娯楽であり、摂る必要はない。味よりもどこで誰とといったシチュエーションに重きを置くようだ。  
……あるいは攻撃方法として喰らいつくことに使われている。俺は戦いたくはないんだけど。

さて、癒しを求めてゲームを始め、すぐに辿り着いた俺にとつてもはやゲームは完結しており、やれレベルだスキルだステータスだ装備だレアアイテムだなんでもう全然興味がない。

そうすると、宿は『樂園』で済ませられるから費用0、必要なアイテムもないからなーんにもお金がかからなかつた。

最初に貰えるお金は最終的に当時は遊びアイテムだつた料理に全部使つた。そしてしばらくしてから、満腹度なるものが実装されてしまつたのだ。

満腹度はログイン中にじりじりと減り、行動を起こせば起こすほど減りも早くなる。数値がゼロになるとバッドステータスを悪い、そこから時間経過で死亡する。

そしてデスペナルティを受けるわけだが、なんとこいつがリアル時間で1時間ログイン不能になるという恐ろしいものだつた。

何が恐ろしいって、ゲーム内は時間の流れが現実の8倍。つまり8時間分の癒しタイムが持つていかれることになつてしまつた。  
しかもゲーム内の俺は素寒貧で、換金できるアイテムも無く、初期装備だけで稼ぐ必要が出てきたのだ。

悪いことつてのは他にもあつて、当時の俺は未だにメンタルに難ありだつたため、キャラクターはともかく、中身に他人が入つてるプレイヤーと関わりを持つことが不可能だつた。

もつと言うなら近くにたくさんいるだけで拳動不審になるレベルだつたので、冒險者ギルドすら使えない始末。

ギルドで発行される非戦闘クエストは受けられず、ソロ且つ初期装備、当然。プレイヤースキルも無いのでゲームアシストだけで戦うという絶望感溢れる環境だつた。

で、ソロだと当然時間がかかるために、その分『楽園』にいられる時間が減る。

で、満腹度問題を片付けるために動こうとしていることで満腹度の減りが通常より僅かに上がる。

しかしそれを回復するアイテム稼ぐのに……という悪循環、負の連鎖、絶望の無限ループによつて、ぶつちやけ諦めた。

もーいーや死ぬまでスライムと遊んで死んだらリアルで寝て過ごすかとか適当に考えて、とりあえず実行した。

そしたらさ。もうあれよ。

俺がまずバッドステータスを負つた時点でスライムたちがあわあわと焦り出して、もう死ぬつて時はなんかもう目とか見当たらぬのにみんな泣きそうになつて。

実際の俺はゲームシステム的に動けないだけであつてその様子をただ見届けるしかなくて。

現実に帰つたらもう涙ぐぢやぐぢやで大変だつた。

そして決意した。もうぜつて一死なねえと。スライムたちを悲しませるわけにはいかんと。

ヘンな話だが、この出来事で俺は精神を少し立て直したんだ。

で、気を取り直してログインしたら普通に『樂園』でリスポートンします。

ああここセーフティエリア兼リスポートン地点になるんだなって思つた矢先に四方八方からスライムが飛びかかってきて組んず解れつの押しくらまんじゅう饅頭と化した。

みんなに謝つて、これからはちゃんと死ならないように、戦つて稼いで帰つてくるつて約束をした。

……が、信じてもらえず。俺にまとわりついたスライムは離れなかつた。いや動けないんですけど？

倒れ込んだ俺の全身をこの可愛い饅頭たちに拘束されたまましばらくすると、なんだか非常にカラフルな集団が『樂園』の奥地からやってきた。

つまりいろんな色のスライムたちが。

で、さつきまで俺を包み込んでいたスライム達が急に退いて、そのカラフルさんが代わりに俺を文字通り包み込んだ。

火のように赤いスライムは右腕を肩から手首まで。

水のように青いスライムは左腕を同じく肩から手首を。

木の樹皮のような焦げ茶色っぽいスライムが首から頭を兜のように。

土のような色合いのスライムは右脚を付け根から足首まで。

金属を思わせる光沢を持つ鉄色スライムが左脚を同じく。

そして最後に、透き通つて少しキラキラと輝いているスライムが、俺の前面背面を鎧のように覆つた。

そして俺は、全身にスライムを装備したのだ。なんで？

なんで???

手先足先以外をスライムに覆われた俺は、ただただ困惑した。意味不明の極みです。

そして、俺を覆うスライムアーマー群が勝手に俺を歩かせ始めた。体が乗つ取られてる……。

『樂園』の出口へ向かわされていると、1匹のスライムが横で一緒に歩いて……移動するという広義的解釈で、歩いていた。なんだか複雑な色合いのスライムで、常に色が変動している。そして何故か歩くときの音がしない。なんだろうと不思議に思いつつ一緒に歩く、もとい歩かされて『樂園』を出た。

出た途端、こいつらは大疾走を始めた。な、何事？　何故に??　驚きは止まることを知らなかつた。

レベルを上げず、ステータスも適当。初期装備しか持たないという全最弱中最も最弱、貧弱＆貧弱、最高峰の底辺なはずだが、なんかもう残像しか見えない速度で草原を爆走バイク。バイクじゃなくてスライムだけど。

そんな速度で移動をすれば、すぐにお隣の大森林へ辿り着いた。なんだつたかな、森の情報も草原の情報を頑張つて集めてる最中に聞いたはずだ。

えーっと。森林は町の南口から行ける。こちらも敵は弱く、木材系の素材アイテムやモンスターの素材も使えるものが多いう非常に優れた狩場、だつたかな。

で、森の浅い場所は弱いモンスター、使えなくはない素材が出る。奥に進めば進むほど、強いモンスター、高品質素材が出る。

毎回身の程を弁えてない馬鹿どもが森に軽い気持ちで入つて養分になる事件が起きる、とかだつたかな。  
うんうん、確かそうだつたね。

ところで皆様こんばんは！　突然ですがクイズです！

『樂園』はどこに出口があるでしょうか??

ヒント1・この草原はどこまで行つても続いてるんじゃないかとい  
うほど広い

ヒント2・他のプレイヤーに見つかりたくないのでかなりの奥地で  
『樂園』へ入つてゐる。

ヒント3・『樂園』は、入る場所と帰つてくる場所は同じである。

えーはい。町から見ればクソ遠い、難易度で言えば養分不可避の最  
奥部へ横合から突入となります。初期装備なんですけど? 戰闘未  
経験よ?? ステータスナメクジよ???

と言つた都合をまるで考慮せずスライムに導かれ、もとい操られて  
森の中へ。

ゲーム的都合なのか、急に始まる鬱蒼とした空氣と光すら遮る密集  
度合いで目の前すら薄暗く、どこからともなく獣らしい鳴き声が木霊  
する。

ガサツとどこかの葉が擦れる音と、それとは反対に無音で何かが俺  
を切り裂いた。

なんて悠長に考えていたのは、スライムボディがその攻撃を難  
無く受け止めたからである。

よく見ると、切り裂かれたように見えた胴体の無色スライムはその  
爪を受け止め、包み込んで拘束しているようだつた。

その様子に慌てた獸は、次の行動を起こす前にもがき始める。常に  
何が起きてるか分からないんです。

しばらくして、なんらかのドロップアイテムと共に獸の姿は消え、  
俺のレベルがゴリゴリ上がつた。倒したらしいね!

えーっと、森林の猿の爪つてのが手に入つたな。襲撃者は猿だつた  
ことがやつと分かつた。フォレストキングモンキーソルジャーとか  
言うクソ長い名前が正式名称なようだ。明らかに初戦闘で戦うべき  
名前ではないことだけは分かる。レベルの上がり方的にも。  
で、そもそもなんで倒したのかすら分からなかつたが、それもやつ  
と理解した。

あの付いてきていたスライムの仕業らしい。倒した場所に突然現れて、そのまま消えていったからすごい驚いた。

どうやらカメレオンのように周囲に溶け込んで消えるようだ。そして死角からなんか攻撃して敵を倒した……忍者スライムと呼ぼう。ニンニン。

ついでに無色スライムの様子を伺うが、まるで意に介していないなかつた。ノーダメージ？

常に理解の外側で勝手にゲームが動いているような……まあスライムたちが楽しそうだからいつか。俺の金欠もこのアイテム売ればマシになるでしょ。

そう考えた俺が次に見たのは、目の前に現れたでかい火球だつた。

巨大な炎が俺を目掛けて飛来する。

森林火災起きそうとかゲームだからか熱くはないなーとか走馬灯のようないに思つた瞬間のこと。

すつと右腕が火球の前に動き、赤スライムに触れた。

すると、炎は吸い込まれるようにスライムの中へ消えて。次に、右脚が持ち上がり、そのまま勢いよく地面を踏み叩いた。そしたら、どこから轟音と、同じくらいさうい悲鳴が上がった。で、ドサッと何かが落ちる音。割と近しだったので近づいて見ると、何かに貫かれたのか大きく穿たれた猿が横たわっていた。そのまま消えていつて、アイテムと経験値がモリモリ。

いやほんと何が起きてんだこれ??

「もう帰りたい……」

思わず出てしまった声に、なぜか俺の身体がびくっと少し跳ねた。で、くるりと向きを変え、また走り出した。草原へ。

「んくく……?????」

一連の動きのすべてが不明です。

本当に意味不明だが、草原へ戻ってくれるようだ。

それでまあ行きの速度も速かつたし、森の中もほとんど進んでなかつたこともあつて、簡単に大草原からの『樂園』へ帰つてこれた。  
「ただいまあく……疲れたし意味わからんし……」

適当に寝転がつて重い空気と共に言葉を吐き出した。

そうそう、『樂園』へ入るなりスライムアーマーはパージされ、今は俺の近くでなんか固まつてぶるぶるしてゐる。よく見たら忍者スライムもぷるぷるしてた。

適当につんつんしたり撫でたりして癒されつつ、考えを整理する。

まずは、さつきまでの謎行動は一切合切無視することにした。

大切なのは、結果的に俺のレベルが上がつて戦えるようになつたこ

と、ドロップアイテムを売れば多少は戦いに役立つアイテムも買えるだろうということだ。

レベル補正だけで、丸腰でその辺のモンスターを倒せるようになれば万々歳、すべての問題が解決したようなものだろう。

「よーしまあよく分かんなかつたけど、みんなありがとう」

やつぱりぶるぶるずだつた6匹をぽんぽんしてみたら、ずっとぶるぶるずだつたのが止まり、なんか嬉しそうになつた。

可愛いなあ。

「そう言えばスキルとかあつたなあ。ここに来るのに役立つスキルないかなー」

基本的に人がいなとはいえ、たぶんきつとおそらくもしかするとゼロではない可能性がないこともないかも知れないので、隠れたり見つかりにくくなつたり、逆にこつちから調べたりとかできるスキルが欲しいなあ。

んーと、独立したスキルと取得後派生するスキルがあつて、どっちのタイプでも進化はしたりしなかつたり、と。

派生の方に便利なのないか後で攻略サイトで調べておこうかな。で、適当に見てたら恐ろしいスキルを発見した。

余りの恐ろしさに気付かぬうちに取得したほどであつた。

そのスキルの名は【意思疎通力向上】。互いの言いたいことや伝えたいことを上手く発信する力が上がる、という、少なくとも話せる人間同士であれば不要のスキルだ。

だが、俺には神スキルに見えた。

重要なのは、このスキルの対象範囲だ。

このスキルは意思疎通を図ろうとする互いに効力を及ぼす。

つまり、俺がこのスキルをスライムたちを対象として発動すれば、擬似的に会話ができるのでは……？

取得後、さつそく試した。

相手？もちろん決まってる。  
さつきの元ふるふるずだ！